

開催にあたって

日本生命財団は1979年に人間性・文化性あふれる真に豊かな社会の建設に資することを願って、日本生命により設立されました。

設立以来、助成の柱のひとつとして、「人間活動と環境保全との調和に関する研究」をテーマとして、環境問題に関する研究助成を行っております。毎年実施してきた研究助成は、これまでの累計で**1,278件、助成総額29億3,200万円**に達しています。

当財団は、これらの研究がさらに進展し研究者間の交流や情報交換が円滑に行われることを願い、併せてテーマに関心を持たれる方々の意見交換の場を提供するため、「助成研究ワークショップ」を開催いたしておりますが、このワークショップも今回で36回目を迎えることとなりました。

今回のワークショップでは、「人間活動と環境保全との調和に関する研究—人と自然が共生する持続可能な地域づくり、自然災害と環境保全—」を募集課題とする学際的総合研究に採択された研究チームから、その研究成果を報告していただきます。

過疎化・高齢化等により農山村が衰退し、里地里山における人間活動も縮小するなか、農山村が果たしてきた自然環境の保全力が弱まり、生態系がもつ多くの機能の劣化に繋がっています。人と自然との豊かで持続可能な関係を築いていくためには、農山村の環境保全と地域社会の再生は欠かせません。生態系の機能回復、第一次産業の今後の取り組み、地域コミュニティの維持再生などは、自然共生社会の実現に向けた大きな課題です。

今回の研究は、「森里連環学に基づく豊かな森と里の再生：芦生の森における研究者と地域との協働に基づく学際実践研究」と題したテーマのもと、京都府南丹市の「芦生の森」を対象として、森里の再生と地域活性化について、学際的立場から調査研究を進めてきたものです。研究者と地域の多様な主体が協働して、豊かな森と里の再生策を実践的に提唱することを目的としています。

まず、代表研究者である京都大学の徳地教授から、研究の趣旨説明を行います。次いで、研究チームのメンバーから、各々研究成果の発表を行います。そして最後に、ゲストの方々も交えて総合討論を行い、研究者と地域の協働のあり方について議論します。

このワークショップの開催が、「豊かな森と里の再生」への歩みをさらに進めていくための良い契機となり、幅広く環境・地域社会の再生保全に向けた活動を推進していく一助となることを強く願っています。

公益財団法人 日本生命財団
「森里連環学に基づく豊かな
森と里の再生」研究会